桜美林大学 大学教育開発センター
Newsletter
No.02
J.F.Oberlin Faculty Development Center Newsletter
2009年7月31日

Contents ▶
1 滑走からTaking offに向けて 2 2008年度 活動報告 3 解説シリーズ②：ティーチング・ティップス（Teaching Tips）
4 授業実践の現場から①：基礎理論科目の成績評価について～「ミクロ経済学」での経験から～ 5 FD研修会、研究会のお知らせ

1 滑走からTaking offに向けて

大学教育開発センター次長 武村 秀雄

当センターは2008年5月末に、教学関係の改善に取組む目的と大学執行部に直結した組織として「教育改善への取組み号」との便名で、「調査・研究開発部門」「FD・SD部門」「情報評価・分析（IR）部門」という3グループ、総勢19名で滑走路に乗り入れた。しかしながら、当センター号は中型機でありながら重量オーバーの状態で、しかも短い滑走路であったことから飛び立つためにはエンジン全開という余裕の無いスタートであった。重い荷物を抱えた乗客数の割には、専任の乗務員不在という格安便であったことから、不安と期待が入り混じった複雑な心境であった。その上、本センターの設立経緯・性格から学内の教職員から認知されるか、協力が得られるかという危惧を抱いたことも事実である。

1年目の滑走を準備期間としての位置づけが許されるなら、学内から一定の評価を期待できるのではないだろうか。振り返ってみると、調査研究開発部門によるセンター研究員のための研究会の開催から始め、FD・SD部門による学内教職員へのシンポジウム（2回）、学内FD実施状況調査、IR部門による教学関係のデータ分析等、予想以上の事業展開ができた。初年度集大成として、「大学教育開発センター年報（第1号）」、「桜美林大学FD実施状況調査報告書」、「Newsletter（No.1）」、「桜美林大学Fact Book 2008」の刊行の運びとなったことは評価できる。短い滑走路上で、中型機の性能以上の加速する力を加えて速度を速めることが可能になったのは、一重にセンター研究員の献身的な努力はもちろんであるが、学内の教職員の理解と支援を得ることができたからと確信している。2年目のtaking offに向けて大いなる弾みをつけることができた。

2年目の「教育改善への取組み号」taking offとしての事業展開は次のように考えている。もちろん、センター年報、Newsletter, Fact Book 2009、学内シンポジウム企画・運営の継続の予定はあるが、今年度の最優先事業は全学自己点検・評価の開始である。今回の自己点検・評価は単なるルーティン作業ではなく、大学基準協会の認証評価を受けるという明確な目的がある。そのためには、全学を挙げての組織的な取組みが必要であることから、本学の部局長で構成された「全学自己点検・評価企画委員会」が設置されており、その企画のもとに実働委員会として「全学自己点検・評価委員会」が近々に立ち上がる。2009年度秋学期から本格的な点検作業を開始し、リベラルアーツ学群完成年度（2010年）の翌年（申請資格充足年度：2011年）の後半には、当センターIR部門中心に委員会作成の点検・評価報告書をもとに認証評価への準備作業に入り、2012年4月の認証評価本番に向けて学内作業を支える計画である。

この自己点検・評価報告書作成及び大学基礎データ草案作成事業は認証評価対応として重要な位置づけになることに異論はないが、本来の意義・役割として、これらの作業を通して大学教育の改善、つまり「学士力向上」、教育の「質保証」への王道であるとの認識は確認しておく必要がある。今後とも、学内教職員の更なる理解と支援をお願いしたい。

2 2008 年度 活動報告

2008 年 5 月 28 日の第 1 回センター会議を以て発足した本センターでは、2009 年 3 月 31 までに 4 回のセンター会議と、合計 17 回に及ぶ部門別会議を開催した。このうち、センター会議では全体的な運営についての話し合を持ち、各部門別会議においては具体的な活動へ向けての話し合いや、実践的な作業が行われた。

部門別会議の活動状況は、①調査・研究開発部門では部門会議を 3 回開催し、この中で将来の桜美林 tips（仮）へと繋がるものとしてセンター内・研究員向けの月例研究会を企画し、これを 2 度にわたって開催した。その他、センターの活動を記録に残すため年報の編集を担った。②FD・SD 部門では部門会議を 6 回開催し、本学全体での FD 実施状況のアンケート調査を進め、この調査の進捗状況・結果の報告を軸として、FD・SD をテーマとした学内向けのシンポジウムを 2 回開催することで情報発信に努めた。なおこの調査の成果を冊子としてまとめた。またこのほか、FD・SD 部門ではセンターの活動を周知するためのニューズレターの企画、編集も担った。③情報評価・分析（IR）部門では部門会議を 8 回開催し、2 回のインタヴュー企画を行うなどして桜美林における IR の在り方を模索しつつ、IR 活動の基礎となる桜美林データブック（仮）の作成を中核として活動を進めたほか、学内データ集積後の課題である認証評価への対応についても情報を収集した。

このほか、部門を問わず学外の研究会・シンポジウム等への参加が推奨され、多くの研究員がその見識を深める機会を得ている。

センター主催イベント・発行物等一覧

2008/10	「桜美林大学大学教育開発センター Newsletter No.01」
2008/10/30	第1回大学教育開発センター学内シンポジウム
2009/1/26	「桜美林大学FD（ファカルティ・ディベロップメント）実施状況調査報告書」
2009/1/27	第2回大学教育開発センター学内シンポジウム
2009/3/31	「2008年度桜美林大学大学教育開発センター年報」
2009/3/31	「桜美林大学 Fact Book 2008」

大学教育開発センター補助研究員　橋爪 孝夫

3 解説シリーズ②：ティーチング・ティップス（Teaching Tips）

名古屋大学高等教育研究センター・教授　夏目 達也

○ティーチング・ティップスとはなにか

ティーチング・ティップス（以下、TT と略）とは、ひとことで言えば、授業を改善するためのヒント・ノウハウ、あるいはそれをまとめた一種のガイドである。ティップ（Tip）を辞書で調べると、ためになる助言とある。レストラン等で支払う「チップ」もこの語である。この訳からは、どことなく軽さが感じられる。内容は複雑でもわかりやすく説明されている。そのため、すぐに理解できて、実際に役立つ、という感じであろうか。その一方で、「賭け・投機などの、専門家による情報・示唆・内報」（リーダーズ英和辞典、研究社）という意味もある。真剣勝負をしている人が本気で求める情報となると、その内容はいい加減では許されない。一見矛盾するこの 2 つの条件を両立させる必要がある。「軽くても、内容は的確であること」、これがポイントである。

○TTの具体例『成長するティップス先生』

外国の大学では多くのTTが作成され、使用されてきた。日本では、名古屋大学高等教育研究センターが開発した『成長するティップス先生』がよく知られている。その内容は、授業を行うために必要でかつ実践的なノウハウが盛り込まれている。具体的には、シラバスの作成、教科書の選定、資料集の作成等の事前準備に始まり、初回の授業ですべきこと、日々の授業の組み立て方、学生の授業参加を促す方法、授業時間外の学習の促し方、成績評価の方法・留意点等々である。成績評価を例にとってみよう。成績評価の厳格化は近年政策的に重視されている。その重要性は理解できても具体的に何をすべきかとなると、経験の浅い教員にとっては難しい。自分なりに対処できている教員でも、いま一段の工夫が必要と感じることもある。そんなときに参照できるのが、このTTである。同名の書籍として市販されているほか、同センターのホームページに掲載されており、だれでも閲覧・利用できる。

同センターでは、このほかにも、『ティップス先生からの7つの提案』を開発している。これまでに、教員編、学生編、大学執行部編、IT授業活用編、教務学生担当職員編の5編を作成している。授業を含めた教育活動を改善するために、多様なアクターが、日常生活の中でどのような点に配慮すべきか、どのような活動を行うべきかを、わかりやすい言葉で簡潔に説明したものである。7の大項目（「学生と接する機会を増やす」「学生を主体的に学習させる」など）について各々7の小項目（計49小項目）を提案している。各項目は1～2行程度の箇条書きである。

○なぜTTが必要なのか。

よい授業を行うことは、教員にとっても学生にとっても切実な願いである。ただし、実際にそれを行うことは、なかなか難しい。授業が成立するには多くの要因が絡んでいることがその一因である。授業時間内の教授活動だけでなく、事前準備、事後のフィードバック等のあり方も授業の質を大きく左右する。事前準備ひとつをとっても、シラバスの周到な作成や教室環境の確認など実に多くの作業を要する。これだけでも大変だが、さらに授業時間内・授業後の活動も多々ある。これらの一つ一つが授業の質に関わってくる。

教員だけが努力するだけでは不十分である。授業は教員だけでは成立しない。教員のほかに学生、職員、大学組織等も関与する。彼らの各々が、授業を成立させるために多様な役割・責任を担っている。よい授業を行うためには、多くの人々がそれぞれの役割・責任を果たすことが不可欠である。その役割・活動内容は多く、かつ複雑である。これらを一定水準以上で実現すること、しかも毎回の授業に向けて継続的に実現することが求められる。よい授業を行うことが難しいというのも頷ける。

○やる気になれるガイド

この複雑な内容を、それぞれのアクターが正確に理解すること、理解を実践に移すことは、さらに難しい。そもそも、総論として理解できても、具体的に何をどうすればよいかとなると、わかりづらい。詳細な説明書があれば、理解できるかもしれない。しかし、それを読んでいるヒマはない。そもそも分厚い説明書では、読む前から気力が失せる。これでは授業改善はおぼつかない。授業改善のやる気を起こさせるガイドが必要である。そのようなガイドの条件は以下の点である。①何をすべきなのかが具体的に示されていること、②誰にとっても納得できる内容であること、③わかりやすいことばで表現されていること、④できるだけ少ない項目に絞り込まれていること、である。授業改善にとってなにより大切なのは、すぐに実践できることである。あまり時間と労力をかけずに、ちょっとした努力でできることである。そして、それが確実に成果に結びつくことである。このような条件を満たすこと、つまり「軽くても、内容は的確」であることが求められる。これにピッタリなのがTTではないだろうか。

4 授業実践の現場から①：
基礎理論科目の成績評価について～「ミクロ経済学」での経験から～

経済・経営学系：リベラルアーツ学群、大学教育開発センター FD・SD 部門研究員　堀　潔

1994年度に本学経済学部に着任以来、「ミクロ経済学」という科目を担当してきた。基礎理論の解説であるが故に内容が抽象的であり、また多少の数学的思考が必要とされるため、学生諸君にとっては「なかなか好きになれない」科目のひとつである。しかしながら経済学教育全体からみれば、「ミクロ経済学」は基礎理論だからこそ応用範囲も広く、学生にはそれ相当の意欲を持ってとりくんでもらわなければ困る科目でもある。

上記を考慮し、「ミクロ経済学」の成績評価に際してはあえて「出席状況」をまったく無視し、試験の結果だけで成績を評価してきた。評価は①授業時間内に行われる4回の中間試験（各 25点満点）と②試験期間内に行われる最終試験（50点満点）の合計点で評価することとし、③合計点が90点以上の学生をA、80点台をB、70点台をC、60点台をD、59点以下をFで不合格とした。

この成績評価方法で15年間毎年同じことをやり続けてきたが、10年ほど前から困った現象が現れ始めた。学期中に4回行う中間試験のとくに初回で成績の悪かった学生のモティベーションが一気に下がってしまい、以後の講義への出席者数が減少したり、講義の雰囲気が沈滞してしまったのである。そこで 7年ほど前から「中間試験の追試験」を実施し、自らの成績が不本意だと考える学生に対して再チャレンジの機会を与えることにした。紙幅の都合上、具体的なデータは出せないが、「追試験」実施以降、高得点の学生は増えている。また、授業に真剣にとりくむ学生が多くなってきたようにも感じる。反面で、私は従来の２倍近くの試験問題を作成し採点なければならなくなったが…。

成績評価の基準は学生のモティベーションに大きな影響を与える。「ミクロ経済学」の場合は、経済学の基礎理論科目であるという性格上、すべての履修者がある程度内容を理解する必要があるため、努力して合格ラインに到達した学生にはその達成度に応じた評価を与えている。場合によっては、すべての履修者がAとなる可能性もある。それが果たしてよいことかどうかは議論の分かれるところであろうが、低学年対象の基礎理論科目に関しては、私はそれでもいいのではないかと（いまは）思っている。

5 FD 研修会、研究会のお知らせ

① 2009年度大学院研修会 （主催：大学院）※大学院講義担当教員対象

日　時　2009年9月14日（月）10:30-16:00（予定）　会　場　町田キャンパス 荊冠堂（チャペル）

講　演　鈴木 克夫、荒木 晶子（その後、各研究科からの院生アンケートに基づく報告と討論会）

②第5回 リベラルアーツ学群FD研究会 （主催：リベラルアーツ学群 FD委員会）

日　時　2009年9月16日（水）17:30-19:00　会　場　町田キャンパス 太平館A202

講　演　大道 卓　司　会　秀島 武敏

編集発行：桜美林大学 大学教育開発センター

〒194-0294 東京都町田市常盤町 3758　桜美林大学 其中館 1 階 101　TEL.042-797-6724（内 3250）　FAX.042-797-6398

E-mail：fdcenter@obirin.ac.jp　Web：http://www.obirin.ac.jp/ri/fdcenter/